

SCG084-01

会場:展示ホール7別室1

時間: 5月25日09:00-09:15

## クリプトテフラを用いた四国南東部の海成段丘編年

### Correlation of marine terrace using cryptotephra in the southeastern Shikoku

松浦 旅人<sup>1\*</sup>, 上野 龍之<sup>1</sup>, 古澤 明<sup>2</sup>

Tabito Matsu'ura<sup>1\*</sup>, Tatsuyuki Ueno<sup>1</sup>, Akira Furusawa<sup>2</sup>

<sup>1</sup>産業技術総合研究所, <sup>2</sup>古澤地質

<sup>1</sup>AIST, <sup>2</sup>Furusawa Geological Survey

四国南東部地域には更新世に形成された海成段丘面が広く分布する。この海成段丘面は隆起速度を議論する際の指標とされており（吉川ほか, 1964）, その隆起速度は1.5m/kyにも達するとされている（小池・町田編, 2001）。しかしこれまでのところ, 海成段丘面の形成年代に関する具体的な指標は提示されていない。本地域は九州を給源とする更新世広域テフラの降下域にありながら, 段丘面の上では削剥が卓越しているために, テフラ層が残存していない。また, 段丘面上に削剥を免れて残されたテフラ微粒子の中で, 風化に抵抗性の弱い火山ガラスは, 降下してから長期間（数十万年以上）経過すると残存していないことが予想される。そこで本研究は, 海成段丘構成層を覆う古土壌に含まれる風化に抵抗力のある石英粒子のガラス包有物に着目し, その化学組成を指標にしたクリプトテフラの対比, および海成段丘面の編年を議論する。本研究は原子力安全・保安院「平成20年度地層処分に係る地質情報データの整備」として実施した。

キーワード:クリプトテフラ,ガラス包有物,化学組成,海成段丘,四国

Keywords: Cryptotephra, Glass inclusion, Chemical composition, Marine terrace, Shikoku